

Title	<書評>Claire Cameron and Peter Moss, Social Pedagogy and Working with Children and Young People, Jassica Kingsley Publishers (London), 2011.
Author(s)	福田, 祥子
Citation	年報人間科学. 42 p.73-p.77
Issue Date	2021-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78353
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈書評〉

Claire Cameron and Peter Moss, *Social Pedagogy and Working with Children and Young People*, Jassica Kingsley Publishers (London), 2011.

福田 祥子

1. はじめに

Social pedagogy (以下、ソーシャルペダゴジー) は、19世紀半ばにドイツで初めて概念化され、現在イギリスや北欧諸国をはじめ、多くのヨーロッパ諸国で幼児教育や社会的養護等の幅広い分野での共通基盤となる重要な概念であり実践方法である。本書ではソーシャルペダゴジーを、教育(education)と福祉(care)が出会う場所や社会問題に関しての広範囲な教育的アプローチ等と表現している(本書：8)。すなわちソーシャルペダゴジーとは、「社会福祉と教育の分野にまたがる実践を表す概念¹⁾」(藤村2017：181)である。

このように、ソーシャルペダゴジーとは極めて包括的な概念であり、ヨーロッパ諸国だけでなく日本でもこの概念についての関心が広がっている²⁾。その主な背景として、子ども・若者が抱える複雑かつ深刻な課題への解決に対して、行政の縦割り体制等も含め、既存制度での対応の限界が明らかになっており、新たな視点やアプローチが求められている点にあるだろう。近年、地域によってスクールソーシャルワーカーの配置等が進んでいる(山野、梅田、厨子：2014)こともそうした新たな方向性の一つである。しかし、教育と福祉の連携は未だ不足しており、諸課題解決のために改善が追求されている。こうした流れにある今、ソーシャルペダゴジーの概念を国際的文脈も含めて深く理解することは、日本の子ども・若者支援のあり方の議論に貢献できると考える。

本書は、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの教育研究所に所属する研究者らによる著書である。同大学は、イギリスで初めてソーシャルペダゴジーを扱う修士課程を設立し、ソーシャルペダゴジーに関する研究を行ってきた。同大学が修士課程を設立した2010年時点では、ソーシャルペダゴジーを扱う文献はドイツや北欧の言語で書かれたものが多く、英語の文献が限られていた。この背景から本書は英語で刊行され、イギリス、ドイツ、デンマーク、ベルギーのソーシャルペダゴジーの考え方や取り組みが紹介されている。本書は、ソーシャルペダゴジーに関して英語で書かれた初の体系的な著書であり、国際比較の観点も含むという点でソーシャルペダゴジーに関する体系的理解を可能としている。

なお、ここでSocial pedagogyの日本語訳に関して述べておく。日本では現在、「社会的教育」(藤村2017：181)とも訳されているが、先行研究の多くで「ソーシャルペダゴジー³⁾」とされていることから、

本稿でも「ソーシャルペダゴジー」の語を用いていく。

2. 本書の構成と概要

まず本書の編著者を簡潔に紹介する。Claire Cameronはユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの教育研究所の教授として、ソーシャルペダゴジーや支援が必要な子どもの教育の領域を専門に研究している。Peter Mossは同研究所の名誉教授で、幼児教育や義務教育、雇用・ケアとジェンダーの関係性等を研究領域としている。

編著者らは、イギリスでの子どもを取り巻く環境とその課題解決の手法、職員の厳しい労働環境を問題視し、現場で働く担当ワーカーの仕事と職場環境を再考し、課題を効果的に解決すべくシステムを再構築すべき段階にあると考えている。この考えのもとで、本書はイギリスの当該分野の研究者のみならず、ソーシャルペダゴジーの担い手となる専門職「ソーシャルペダゴグ⁴⁾」を目指す学生に向けて書かれた（本書：27）ものでもある。

本書は11章から成り、ソーシャルペダゴジーと学校教育の関係性や幼児教育における多様性の問題に関してソーシャルペダゴグがどう関わっていくか等様々な視点から述べられているが、ここでは特に興味深い第2、5、8章について述べる。

第2章の著者は、ソーシャルペダゴジーを広める活動等を行う組織「ThemPra」に所属している。ThemPraはソーシャルペダゴジーについて学習できる短期研修やソーシャルペダゴジーを組織内に定着させるための支援等を行う民間団体である。ThemPraはイギリスやドイツ等の様々な国でソーシャルペダゴグとしての実践の経験等がある6名のメンバーで構成されている。第2章では、まずソーシャルペダゴジーの源流があるドイツでの歴史を述べた上で、ソーシャルペダゴジーを習得するにあたり、ウェルビーイングと幸福、学習機会、関係性、エンパワメントという4つの軸の理解が必要であることを説明している。ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン等様々な組織と活動してきた経験を元に、ソーシャルペダゴジーの概念を4つの軸に分け、ダイヤモンドモデルという枠組みを構築している点は興味深い。

第5章は、デンマークの子どもと若者の施設ケアを対象とし、ソーシャルペダゴジーの相互対話アプローチの妥当性を示している。デンマークでは、家庭外のケアを必要とする子どもや若者は施設に措置されることが多い点が指摘される⁵⁾（本書：86）。本章は、デンマークのソーシャルペダゴジーの特徴を理解する上で役立つが、詳細は後述する。

第8章では、デンマークの研究者が、質的調査を用いて、イギリス、ハンガリー、デンマークのペダゴジカルアプローチを比較している。この調査では、まず保育所での日常生活が撮影され、撮影されたビデオを参加した職員に見てもらう。その後その職員らを対象にインタビューを行い、そのインタビューを調査者が分析するというものである。この調査結果から、各国で保育所や保育所で働く職員に求められる役割の違いがあることがわかる。イギリスでは学習に重きを置く就学前教育の機能が重視され、ハンガリーでは家庭や家族の役割が重視されていた。一方、デンマークでは、子どもは自分自身の生活を過ごすこと

ができ、遊びを通して他の子どもと関わっていくものと見なされ、子どもが自分自身の生活を過ごすことが重要と考えられている。そして、職員は遊んでいる子どもたちを見守り、対話を通して関係を築いていくという特徴がみられた。観察結果とインタビュー結果を組み合わせた分析により、各国のアプローチ方法の違いやソーシャルペダゴジー概念の解釈の複雑さを示している点は興味深い。

3. デンマークにおけるソーシャルペダゴジー

3.1 デンマークにおけるソーシャルペダゴジーの歴史的展開

ここでは、デンマークの施設ケアについて述べられている第5章を取り上げ、デンマークにおけるソーシャルペダゴジーの展開を整理する。

デンマークでは、19世紀末に初めて幼稚園が開設された頃からドイツを源流とするペダゴジーの概念が伝わっていた(Jensen2016:105)が、「ソーシャルペダゴジー」と言う言葉が使われるようになったのは1960年代以降であった。その際、「ソーシャルペダゴジー」の定義にあたり2つの議論がなされた。一つは、狭義のソーシャルペダゴジーで、社会における様々な対立や社会問題に注目するものであった。他方は、広義なソーシャルペダゴジーで、学校、幼稚園、家族、ソーシャルワークと言う複数の分野で個人の成長と社会化を図る概念という意味であった。デンマークでは狭義のソーシャルペダゴジーの考え方が長く用いられてきたが、1960年代から70年代にかけて広義のソーシャルペダゴジーについて議論されるようになり、実践で用いられるようになった(本書:87)。現在、デンマークでのペダゴジーとは、3つの領域(幼児教育・学童期の余暇活動・社会福祉サービス)におけるものであり⁶⁾、特に福祉の支援が必要な子ども・若者・大人に対するペダゴジーをソーシャルペダゴジーと言う。そのペダゴジーに携わる専門職がペダゴグ⁷⁾であり、その養成のために大学には専門課程がある。デンマークでは20世紀初頭にペダゴジーに関する専門職養成課程が創設されたが、専門職として広がったのは戦後のことであり、多くの女性が保育所や学校等の公的セクターで働くようになったことと連動している。

3.2 デンマークのソーシャルペダゴジーの特徴

ソーシャルペダゴジーのアプローチ方法では、「補完」というよりは、「将来への方向づけ」が重視されていると、著者は指摘している。「補完」とは、個々の欠陥、問題のあるバックグラウンドに着目し、補っていくことであり、子どもの過去に着目することである。一方、「将来への方向づけ」は、子どもたちにとって質の高い人生を送るには何が必要かを考えようとするものである。過去、現在、未来をつなげることがソーシャルペダゴジーにおいての重要な視点(本書:91-92)と述べられている。

本章ではデンマークのソーシャルペダゴジーの例として、デンマークの施設ケアを取り上げている。デンマークにも、家庭外ケアが必要となり児童養護施設に措置される子どもがいる。福祉の支援を必要とする子どもや若者にとって、将来の選択肢や行動の可能性が増えることが重要であり、ソーシャルペダゴグは彼らが社会や文化に参加できるように個々にアプローチしていく(本書:89-90)。

子どもの成長を促し、必要に応じて介入していくことは教育の場面でもみられる。しかし、教育的アプローチはさまざまな規則や構造、大人によるコントロールが影響しがちであり、対象者の性格や心理的・情緒的側面にのみ着目しすぎる傾向がある点が指摘されている。一方で、ソーシャルペダゴジーのアプローチでは、支援対象となる子どもと関わり、対話を通じて親密な関係を築いていく。対話を通じて子どもと関わることで、個々の違いに対応して社会に適応できるように促すことが可能となる。

4. おわりにー日本におけるソーシャルペダゴジーの可能性ー

以上のように子どもや若者の支援においては、過去、現在、未来という一連の流れを意識することが重要で、それを可能とするのは対話である。ソーシャルペダゴジーの解釈を通じて、子どもや若者への支援とは何なのか、子どもや若者と関わる上で必要なこと、それらを実践していく専門性について提示することができる。日本でも教育と福祉の連携が重要視され、スクールソーシャルワーカーの配置等が進んでいる。2008年に「スクールソーシャルワーク活用事業」が国により予算化されたものの、翌年には国庫補助が1/3へ変更され、財政上の課題から事業が後退した等の問題があり（田中：2013）、専門職といたながらも非正規雇用等不安定な状況が現在も続く。今後は、学校や福祉施設等の現場において、また日本の社会においても教育と福祉の連携を進めるための専門職に対する理解が必要である。また、専門職を配置するだけでなく、子どもや若者への支援とは何かを改めて考え直すことも重要で、そのためにソーシャルペダゴジーの概念は大きな示唆を与えるであろう。

参考文献

- [1] Niels Rosendal Jensen, 2015, "Social Pedagogy in Denmark." *Pedagogia Social Revista Interuniversitaria*, 27: 103-127.
- [2] 佐藤桃子, 2014, 「デンマークにおける子どもの社会的養護：予防的役割の必要性」『年報人間科学』大阪大学大学院人間科学研究科, 35: 53-71.
- [3] 田中尚, 2013, 「スクールソーシャルワークの展開の今日的意義」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』, 15, 13-20.
- [4] 藤村好美, 2017, 「カナダのアンティゴニッシュ運動の思想と実践ーSocial Pedagogyの視点からの考察ー」『群馬県立女子大学紀要』, 38: 181-192.
- [5] 細井勇, 2016, 「ソーシャル・ペダゴジーと児童養護施設ー福祉レジームの観点からの国際比較研究」『福岡県立大学人間社会学紀要』24-2: 1-21.
- [6] 山野則子, 梅田直美, 厨子健一, 2014, 「効果的スクールソーシャルワーカー配置プログラム構築に向けた全国調査：効果的プログラム要素の実施状況、および効果（アウトカム）との相関分析」『社会福祉学』一般社団法人日本社会福祉学会, 54-4: 82-97.

注

- 1) 他にも、「教育と児童福祉等を横断する理念であり、理論であり、実践方法である」(細井：2016)と表現されているように、ソーシャルペダゴジーとは、概念や実践方法等を包括的に表す言葉である。
- 2) 一般社団法人日本ソーシャルペダゴジー学会が設立される等、ソーシャルペダゴジーの研究も進んでいる。
- 3) 細井(2016)や藤村(2017)は「ソーシャル・ペダゴジー」と言う言葉を使っている。
- 4) ソーシャルペダゴジーの担い手はソーシャルペダゴグと呼ばれ、大学レベルで養成される専門職である(細井：2016)。
- 5) 佐藤(2014)によれば、最初に子どもが措置された家庭外ケアの場の割合は、2011年で里親家庭全体が36%、児童養護施設が28%である。
- 6) 1992年以降、幼児教育でのペダゴグ(主に幼児教育のサービスにおいて)・余暇活動のペダゴグ(主に学童期の子どもの学外のサービスにおいて)・ソーシャルペダゴグ(主に幅広い社会福祉サービスを受けている子ども・若者・大人に対して)の3つの分野の専門職が統合され、ペダゴグが包括的な専門職となった(本書：141)。
- 7) Social pedagogue と書かれているが、デンマークにおけるペダゴジーの担い手である専門職を「ペダゴグ」(佐藤2014：64)と日本語訳されることが多いことからここでも「ペダゴグ」を用いる。